INTERVIEW / 実装の場をつくる

AI・ロボットの社会実装を、空港から形にする。



経済産業省　商務情報政策局　AI 産業戦略室　AI ロボティクス室
室長補佐

梁島　拓郎

KEY MESSAGE

空港の現場と一緒に、使われるロボットを育てていきたい。

Q1 AI・ロボット政策における社会実装の方向性

AI・ロボットが実際の現場で活躍する社会に向けて、政策としてどのような方向性で取組を進めているのでしょうか。

私は以前、民間企業で製造現場の自動化やロボット導入に携わっていましたが、良い技術があれば自然に普及するわけではないことを実感してきました。実際には、安全性や運用ルール、導入コスト、現場で使いこなせる仕組みなど、さまざまな要素が揃って初めて社会実装につながります。

そのため経済産業省では、技術開発支援だけでなく、標準化やルール形成、オープンな開発基盤の整備などにも取り組んでいます。また、NEDO Challenge のような仕組みを通じて、多様なプレイヤーが新しいアイデアで挑戦できる機会をつくり、社会課題の解決につながる技術を現場へ届けていきたいと考えています。

Q2 実装フィールドとしての空港グランドハンドリングの特徴・可能性

ロボット技術を実際に導入・活用する場として、空港グランドハンドリングにはどのような特徴や可能性を感じていますか。

空港グランドハンドリングは、ロボット化のニーズが非常に高い一方で、自動化の難易度も高い現場だと感じています。手荷物は大きさや重さ、材質がバラバラで、しかも限られた空間の中で安全かつスピーディーに作業しなければなりません。

だからこそ、ここで通用する技術ができれば、他の現場にも横展開できる可能性があります。物流や倉庫、製造現場などでも同じような課題は多く、空港はロボット技術の実力を試し、磨くことができる非常に良いフィールドだと思っています。今回のチャレンジを通じて、これまでになかった発想や技術が出てくることを期待しています。



図 1　NEDO Challenge, Baggage-Loading Robot の概要を説明される様子

Q3 ロボット技術の実装フィールドを形成するうえでの課題

政策が目指す社会実装を、空港の現場で形にしていくには、どのような課題があるのでしょうか。ロボット技術を導入・活用できる場をつくるうえでの難しさをお聞かせください。

ロボット開発では技術そのものに注目が集まりがちですが、社会実装の観点では「現場で本当に使われるか」が最も重要です。性能が高くても、導入や運用の負担が大きければ普及は進みません。

特に空港は安全性と定時運航が最優先の現場です。そのため、新しい技術を導入する際には、利用者側が安心して受け入れられることも重要になります。開発側と現場側が早い段階から対話しながら課題を共有し、一緒に解決策を作り上げていくことが欠かせません。今回の NEDO Challenge も、そうした対話や協力関係が生まれるきっかけになればと考えています。

PROFILE
プロフィール

経済産業省　商務情報政策局　AI 産業戦略室　AI ロボティクス室　室長補佐

梁島　拓郎

民間企業において、製品開発、量産化技術開発、生産技術開発、および製造現場の自動化・ロボット活用に従事。製造設備の開発・導入や安全性評価にも携わる。2025 年 5 月より経済産業省に出向。
現在は、AI ロボティクス室において、ロボットのオープン開発基盤の構築、ロボットの標準化・ルール形成、SBIR（中小企業イノベーション創出推進事業）、および NEDO Challenge 等、ロボット関連施策を担当。産学官連携を通じたロボット・AI 技術の社会実装促進とロボティクスエコシステムの構築に取り組んでいる。